

令和元年6月24日現在

機関番号：32303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04310

研究課題名(和文)対話的異文化理解の教育方法をめぐる実践及び理論的研究

研究課題名(英文)Practical and theoretical study on educational methods for dialogical intercultural understanding

研究代表者

OH SUN AH (OH, SUN AH)

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・教授

研究者番号：90363308

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本と韓国の大学、日本と中国の大学、および日本と中国の高校の間での交流授業を複数回実施した。それらの実践的研究は、作成した物語について交流する方法、少人数での直接対面式授業と多人数での集団間非対面式交流授業を組み合わせる方法など、多様な交流方法で実施され、交流の中での学生たちの文化的他者理解の変容過程が分析された。個別の交流の分析からは、「顔の見える 見えない形式の交流」と交流者間の信頼との関連、物語的側面からの異文化理解過程の検討、など理論的な面での成果を得ることができた。全体的には、異文化理解においてそれを下支えする「情動的側面」での変化の重要性が再確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

最も大きな成果は、多様なカテゴリーに属する学生間で、様々な形式の下で対話的交流を行い、学生の文化的他者理解過程について多くのデータを蓄積できた点にある。また、それにより、対話的手法で異文化理解教育を行う目的の理論化(「対話的ワクチン」等)や手法の洗練・背景となる理論の充実を行えた事は、これまでの対話的な異文化理解教育研究から、さらに実践・理論間の架橋を図れたという意味で大きな成果があった。さらに、今日の多文化的状況においては、文化的背景の違いによる対立が増加すると考えられ、対立の対話的緩和とそのための教育方法のバックグラウンドデータを提供できる本研究の成果は、社会的な面でも大きな意義を持つ。

研究成果の概要(英文)： Exchange classes were implemented multiple times between Japanese and Korean universities, Japanese and Chinese universities, and Japanese and Chinese high schools. In these practical studies, a variety of interaction methods was employed, such as interactions related to students' stories and a combination of small group direct meetings and large group non-direct meetings. Furthermore, the process of change in students' understanding of cultural others through these exchange classes was analyzed. Theoretical findings were also obtained by analyzing individual exchange classes; for example, the relationship between "interaction in face visible/invisible form" and the trust between participants and the process of intercultural understanding through story examination. In essence, the importance of the change in "emotional aspects" that underpin intercultural understanding was reconfirmed.

研究分野：教育心理学

キーワード：対話的異文化理解 交流授業 教育方法 関係調整のシステム 日韓 日中

1. 研究開始当初の背景

異なる文化的背景を持つ人々が、対立する思想や慣習などを持ちながらも、共同的に生活していかざるを得ない状況が世界的に生じている。そうした現代において、異質な他者との関係調整・対話の方法をめぐる、より実践的な異文化理解教育の必要性が高まっている。また、そうした状況の変化は従来の研究における「文化」概念・理論自体の見直しを迫るものともなっている。

こうした社会的状況や、心理学における「文化」研究の現状に対して、日中韓の多様な文脈で実際に行った対話的異文化理解授業を素材に、教育実践の観点からはどのように授業方法の改善が見込めるか、という点について検討すること、また、異文化理解の心理的变化の過程とその理論化についての観点からは、そうした異文化理解過程の詳細な検討を通じて、心理学における文化についての概念・理論について検討を加えること、が本研究開始当初の問題意識と言える。

2. 研究の目的

上記のような問題意識に基づいて、(1) 日中韓の大学・高校を結んだ対話的異文化理解教育実践の実施、(2) その結果をもとに、より効果的な異文化理解教育の方法的検討、(3) そうした実践への参加者の異文化理解の変化の過程について、対話データに対して詳細な分析・評価を行うことを通じた検討、(3) 異文化理解過程についての分析結果に基づいた新たな文化理論の提案、が本研究の目的である。

3. 研究の方法

日本・韓国・中国の大学または高校間で交流授業を複数回実施し、それぞれの授業における事例や成果をめぐる、定期的に行う全体会議(2016年:横浜、2017年:北京・ソウル、2018年:東京)において、お互いに議論することを通じて、異文化理解教育の方法上の洗練を図るとともに、新たな教育方法の提案も行った。また、議論の中で提案されたさまざまな文化理解に関する理論上の問題・テーマについては、《Integrative Psychological and Behavioral Science》誌や学会シンポジウムなどにおいても発表を行った。

実施した交流授業は以下のとおりである。

- (1) 交流1: 共愛学園前橋国際大学(日本: 呉宣児) - 東国大学(韓国: 崔順子)
- (2) 交流2: 東京学芸大学(日本: 榊原知美) - 中国政法大学(中国: 片成男)
- (3) 交流3: 北京師範大学(中国: 田島充士・姜英敏)での国内学生 留学生間の交流
- (4) 交流4: 北京 岡山の高校間交流(中国・日本: 渡辺忠温)

4. 研究成果

(1) 日本 韓国の大学間での交流(交流1: 共愛学園前橋国際大学・東国大学)

日本の授業担当者である呉と韓国の授業担当者である崔は、2010年度から継続的に日韓の交流授業を行ってきた(呉・崔・山本, 2014; Oh, 2017)。それらの交流授業では、日韓の大学生の間で感想文のやりとり(のみ)を繰り返す(日韓それぞれの授業で映画を視聴し短い感想文を書く、相手国に送りお互いに相手国の大学生たちの感想文を読む、相手国の感想文を読んだ二次感想文を書いて送る、相手国大学生の二次感想文を読み、また短い感想文を書く)というプロセスの中で「自分達 他者達」への理解の変化を検討した(交流形式A)。

そうした「顔の見えない関係」での感想文交換という間接的対話に対して、本研究課題では、2016年~2017年にかけて、より直接的な「顔の見える関係」の中で交流授業を行った(交流形式B)。2016年の9月、日本人学生5人が韓国を訪れ、韓国人学生4人と、互いに生活文化の紹介を行ったり、一緒にソウル市内を歩いたりしながら二日間楽しく過ごし、「知り合い・友達」になって日本へ戻った。10月以降は、日韓共同ドキュメンタリー「あんにょん・サヨナラ」(キム・= テイル・加藤久美子監督、2006年)を日韓学生がともに見て、交流形式Aと同じように、映画への感想文と相手国大学生の感想に対する感想文交換を行った。交流形式Bを検討した結果、交流形式Aではあまり見られなかった点として、「私」と「わたしたちの国」を分離する傾向や、相手(国)の非を語る場合は、自分・自国の非もセットにして語り、非を語るとき、国を一括して語ることを避け、部分に分けて語る傾向が見られた。これらの結果は、「関わりのない他者」と「関わりのある他者」という違いから、「関係の断絶と持続」という軸が揺れ動いていると思われる。

(2) 日本 中国の大学間での交流(交流2: 東京学芸大学・中国政法大学)

東京学芸大学と中国政法大学との間でも、2010年からほぼ毎年対話的交流授業を継続的に行っており、その中では、大学生の異文化理解プロセスや、それを促す交流授業のあり方に関する知見が得られており(e.g., Sakakibara, 2017; Pian, 2017)。本研究の期間においてもそれらの知見を基礎として、主に日本と中国の学生の間で、物語作成を用いた対話的交流授業を行

った。

物語の作成を用いた交流授業は「交通ルールの捉え方」というテーマで2016～2017年にかけて合計12回（日本6回、中国6回）にわたり実施された。2016年には初回授業において、車が十字路を右折し、横断歩道を渡っていた歩行者と接触しそうな場面、接触しそうな車になった車の運転手と歩行者がやり取りをしている場面、通りがかった歩行者が加わり3人でやり取りをしている場面の3つの場面で構成されたイラストを学生に提示し、「日常で普通にあり得る範囲内」でイラストに合わせた物語をグループで作成させた。学生の物語は翻訳のうえ、相手国の学生に配布した。これに対する感想や質問が返送されるという形で日中の対話が進められた。また、2017年には別の学生を対象とした授業において、2016年に日中の学生が作成した物語を配布し、歩行者、運転手、通りがかりの人が、交通ルールに対してそれぞれどのような認識を持っているかを分析させ、日中で交換、議論した。その結果、日中の学生では交通法規に対する考え方に違いがみられるなど、いくつかの特徴的な解釈フレームの差異がみられ、それが物語の分析や議論に影響を与えている可能性が示唆された。

(3) 中国の大学内での国内学生 留学生間の交流（交流3）

北京師範大学において、日本人留学生と中国人学生との間で葛藤の解消を目指した対話型授業を二回実施した。2018年には、日中の学生間で特に見解が分かれるテーマを特定し、その葛藤を、話し合い活動を通じて解消する実験授業を実施した。さらに葛藤的な場面における人々の知的／情動的思考の統合を目指した演劇的手法を参照し、知的なディスカッションだけでは達成することが困難な、葛藤に対する対話的な省察を深める方法論について研究を進めた。2019年にはこの研究成果を基盤に設計したプログラムにより、再度、北京師範大学において授業を実施し、肯定的な雰囲気の中で互いの立場について理解し、感情まで含めた解決策を模索する方法を参加者自らが見出すプロセスが観察された。

(4) 日本 中国の高校間での交流（交流4）

2018年11月～2019年1月に、日本（岡山）の高校生と中国（北京）の高校生の間で、各国で3回の交流授業を行った。交流授業は、贈り物に関する共通のエピソードについての感想と、お互いの国の感想に対するコメントを、個人用ワークシートへおよび小グループでの議論の後に記入するグループ用ワークシートに書いてもらい、それらを翻訳したうえで相手の国に送り、シートを交換し合うことで議論を進めた。

今回の交流授業を通じて、贈り物をめぐる日本と中国の間での慣習や考え方の共通性と違いについて理解することだけではなく、それぞれの国の中での考え方の違いについても一定程度は理解を深めることができた。また、高校生異文化間での議論の進め方についても、交流の中で変化が見られた。

(5) 総括

本研究課題では、上記のような4つのタイプの交流実践を行い、その実践の経過などについて全体会議で話し合うことで理論的な検討も行ってきた。まとめれば、本研究課題では、以下のような点が全体として得られた成果と言える。

- (a) 対話的異文化理解授業の形式を、より多人数の集団間での非対面式の交流（交流2・交流4）、少数数での対面式の交流（交流1・交流3）という2つの形式で行ったことで、両形式で交流授業を行った際の、異文化理解のあり方・学生の変化のし方についての比較が可能になるときに、学生が置かれた環境（設備なども含め）に応じた、対話的な異文化理解教育の方法の選択肢を増やすことができた。
- (b) 対話的に議論を進めていく際の議論の素材となるものについても、物語を作成し、作成した物語をめぐって交流する・分析させるなど、提示された素材（物語・映画など）を使うだけではなく、参加している学生たち自身が作成した素材を用いた交流授業も実施された（交流2）。さらに、全体の議論の中では、議論を通じて単に交流授業の中でお互いの「理解」を深めるだけではなく、協働的に何かの作業を行うなどの新しい形での交流授業の形式についても検討を行うようになってきている。
- (c) 上記(a)や(b)の論点は、上記交流3において特に強調されているように、同時に、相手の国・文化に対する「知的な理解」だけにとどまらず、「感情までも含めた関係調整方法」の重要性にもつながる。本研究課題の中でも、学生同士の交流の中で、また、全体的にそれらの事例を検討する中で、情動的な面も含めて、異文化と協働していくことの難しさ、それを教育的に実現していくための方策（たとえば交流1で言えば顔が見える関係での交流など）について議論が重ねられた。

本研究課題において得られたこれらの成果を踏まえて、今後は、さらに交流授業の形式・進め方について検討していくとともに、理論的な検討を加えていくことが必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7件)

- Oh, S. (2017) Dialogical Exchange Class using Movies for Mutual Understanding between a Korean and a Japanese University, *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51(3) pp379-390, DOI: 10.1007/s12124-017-9392-8
- Pian, C. (2017) What happened in dialogical classes of intercultural understanding?: An analysis of exchanging classes between Chinese and Japanese university students, *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51(3) ,391-402, DOI: 10.1007/s12124-017-9393-7
- Sakakibara, T. (2017) Intercultural Understanding through Intergroup Dialogue between Japanese and Chinese University Students, *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51(3), 359-378, DOI: 10.1007/s12124-017-9390-x
- Tajima, A. (2017) "Dialogic vaccine" to bridge opposing cultural viewpoints: Using Bakhtin's views on dialogue and estrangement, *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51(3) ,419-431, DOI: 10.1007/s12124-017-9394-6
- Watanabe, T. (2017) The Story-Presenting Method: A Method for Constructing Multiple Viewpoints to Understand Different Cultures, *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51(3) ,403-418, DOI: 10.1007/s12124-017-9391-9
- Yamamoto, T. (2017) Cultural Psychology of Differences and EMS; a New Theoretical Framework for Understanding and Reconstructing Culture, *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 51(3),345-358, DOI 10.1007/s12124-017-9388-4
- Yamamoto, T. & Takahashi, N. (2018) Possessions and Money beyond Market Economy, in Rosa, A. & Valsiner, J. (eds.) *The Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology*. 319-332, Cambridge, Cambridge University Press.

〔学会発表〕(計 3 件)

渡辺忠温・榊原知美・野原みゆき・呉宣児・高橋登・田島充土・南博文、自主シンポジウム「プロセスから考える異文化理解 異文化理解研究の実践と理論をつなぐ」日本発達心理学会第27回総会 2016年4月北海道大学

Watanabe, T., Pian, C., Sakakibara, T., Oh, S., Yamamoto, T., Valsiner, J., Tajima, A. "Contributed Symposium "How can we understand and study culture? New methodologies of dialogical research for mutual understanding." The 31st International Congress of Psychology in Yokohama.

渡辺忠温・山本登志哉・呉宣児・崔順子・榊原知美・片成男・田島充土・姜英敏・釜田聡、シンポジウム「対話的異文化理解授業実践のあり方を考える：国際理解教育とのコラボレーション」日本教育心理学会第60回総会 2018年9月慶応義塾大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年：
 国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年：
 国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://rcsp.main.jp/mc/index.html>

(1)研究分担者

研究分担者氏名：榊原知美

ローマ字氏名：SAKAKIBRA TOMOMI

所属研究機関名：東京学芸大学

部局名：国際教育センター

職名：准教授

研究者番号（8桁）：20435275

研究分担者氏名：田島充士

ローマ字氏名：TAJIMA ATSUSHI

所属研究機関名：東京外国語大学

部局名：大学院総合国際学研究院

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30515630

研究分担者氏名：高橋登

ローマ字氏名：TAKAHASHI NOBORU

所属研究機関名：大阪教育大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：00188038

研究分担者氏名：渡辺忠温

ローマ字氏名：WATANABE TADAHARU

所属研究機関名：東京学芸大学

部局名：国際教育センター

職名：個人研究員

研究者番号（8桁）：20827836

（平成30年度から）

(2)研究協力者

研究協力者氏名：崔順子

ローマ字氏名：CHOI SOONJA

研究協力者氏名：姜英敏

ローマ字氏名：JIANG YINGMIN

研究協力者氏名：片成男

ローマ字氏名：PIAN CHENGNAN

研究協力者氏名：山本登志哉

ローマ字氏名：YAMAMOTO TOSHIYA

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。